

論文執筆の動機および経過大要・論文要旨

一、研究動機：

戦後日本が一躍廃墟から経済大国になり、世界を挙げて日本に習えの世風に乗って、日本語学習が世界的な規模で始まった。本研究は、戦後に時代を限り、更に漢字圏を対象をしぼり、歴史の流れと世界政治情勢の中で、如何に漢字圏において日本語が学習されたかを、史的に研究するものである。

もちろん、第二次大戦において、日本を除く漢字圏の国々は、かつて日本の侵略を受け、実質的には被害者であり、日本は加害者であった。しかし、この歴史的な過去の嫌な思い出をかなぐり捨て、これらの国々がなぜ、如何に日本語を学習するようになったかを史的に探究するものである。それ故、過去の歴史の中での日本の立場を明確にすることも必要になり、日本が如何に過去のハンデを背負いながらも、この漢字圏における日本語教育に協力し、それを盛り上げてきたかを研究の対象に加え、時代の限定の尺度とした。

二、経過大要：

筆者は日本語教育に携わること三十四年、時代の趨勢の中で台湾における日本語教育も1987年から政治の民主化にともない、解禁を得た。従って1988年から正式にこの問題を取り上げ、執筆に着手した。最初の二・三年は資料の収集に没頭し、日本、中国大陸、香港、マカオなどの資料の収集と実地調査を続け、本格的に執筆を開始したのは1992年入ってからのことである。もちろんいろいろな資料は年と共に更新を繰り返し、その度にまた新しい資料を加えながら斟酌増筆・修正を加えた。本稿の大要ができ上がったのは去年の年末のことである。

三、論文大要：

本研究は漢字圏における日本語教育の現状と問題点を、戦前戦後を通じて歴史的に解明するものである。本論文のいわゆる漢字圏とは日本・中国・香港・マカオ・台湾を指すのでこの地域の持つ時代的趨勢の中には太平洋戦争が大きな背景となってくる。従って本論文の叙述に当たっては、この太平洋戦争を境とし、日本語教育の普及と及び歴史的・政治的背景、大学などの教育施設の制度と運営、教師の養成やカリキュラムの実態、日本語学習希望者の内約や動機、政府諸機関の支援活動、留学生受入の現状といった項目に分けて分析を行った。巻末にこれら地域における日本語教育施設の詳細な一覧表（1996年12月現在）を提示し、資料の付加価値を付与した。

さらに本研究の半分の紙幅を日本、特に戦後の日本における日本語教育、取り分け留学

生・就学性の受け入れ実態や問題点に重点を置いた。中曽根前首相のいわゆる「留学生十万人計画」が半ば頓挫している現状に鑑み、これからの漢字圏からの留学生・就学生のよりよい学習環境を考え、ここでは忌憚のない意見を述べた。それには受け入れ態勢の不備のほかに、教師の不足、国費留学生の選考の問題点、私費留学生の受け入れにおける身元保証人問題、入国手続きの煩瑣不法滞在問題を理由とした不当な規制強化、大学における学位取得の不合理性、取り分け博士学位取得の困難さなどを挙げ、日本人の意識改革、地域教育事業の推進・ボランティアの育成、マルチメディアによる日本語教育事業への支援などによる日本語の国際化を促進するひとつの目安とした。

関係資料は先学がすでにその大著をなしている場合はその大著を引用させてもらい、その他の実態や問題点は筆者のアンケート調査、実地調査によるものである。